

# 記紀の偽作を糺す 「古代日本原記」―日本人の先祖と日本建国黎明史(要約)

山下重良著

<http://www.syamashita.net/history/>

平成二十七年十月四日追記

「古事記や、「日本書紀」(以下「記紀」と略記)に消された古代の史実を、古神社の縁起や考古史料・古史古伝・近隣諸国の古代史、また、古墳や宮跡等から解読された墓誌で古代人物の実年代を糺しながら現地踏査で確認し、この国の成り立ちや古代の真相を追究した。

国民は「記紀」や、「続日本紀」(以下、「続紀」と略記)を底本にした教科書で国史を教えられ、それを史実と思い込んできた。しかし、意外やこの国の成り立ちや古代の真相は驚愕の連続で衝撃の新事実が幾つも明らかになった。

## 第一章 人類の誕生と日本人の先祖

人類の誕生から日本列島への移住・定住の歴史を辿り、日本人の先祖となった人々の姿を追い求めた。

## 第二章 太古の浪漫 弥生文明を先導した徐福

中国は秦の始皇帝時代の紀元前218年から210年にかけて、戦乱を逃れた徐(徐)福一族は三回にわたって数千人を連れて日本列島各地に集団移住した。

彼等は、長江(揚子江)流域のすぐれた水田稲作をはじめ、養蚕や機織等の技術・五穀の種・漁獲用具等を携えて縄文の日本列島に弥生文明を先導して我々多くの日本人の先祖となった。徐福の先祖を辿ると、儒教の開祖孔子の高弟子路の七世孫だった。徐福の偉業は太古の浪漫として未永く伝えていきたい。今に日本列島各地に残る「徐福伝説」は、紀元前三世紀の史実だったことを証明した。

縄文・弥生の時代いえども、この世に神代と云うような時代はなかったことを証明した。「記紀」の神代神話は、

在りもしない神名を造作し、建国黎明期に活躍した人々の史実を曖昧にして抹殺する手口だった。

### 第三章 日本列島に初めて和国を建国した須佐之男尊

BC188年頃に出雲で生まれた須佐之男尊は、食糧や領地争いを繰り返していた人々に、「和の心」をモットーにし須佐王と呼ばれて出雲国を建国した。やがて西日本・九州の小諸国の豪族を提携させ、紀元前150年頃、九州の豊国や日向に政庁を置き、連合和国を建国した始祖王だった。中国の「漢書」や「魏志」は、倭人・倭国と書いた。

須佐之男尊は、死して出雲の熊野大社旧宮の磐座に葬られ神祖熊野大神櫛御氣野尊として祀られた。そこから神霊を勧請した紀伊の熊野本宮大社は、家津御子大神に改変されている。「書紀」は蔑んだ文字を使って「素戔嗚尊」と書き、暴れ神にして史実を抹殺した。しかし、全国各地の夥しい神社に祀られ神祖として崇められていた。

大同五(810)年正月、嵯峨天皇は、「須佐之男尊は即ち皇国の本主なり。故に日本の総社と崇め給いしなり」として、須佐之男尊を祀る津島神社に神格正一位を贈り、日本総社の号を奉られた。「出雲風土記」は、「神須佐乃乎命は仁慈の名君だった」と称えている。

### 第四章 大和建国の霸王大歳(改名「饒速日」)尊

「記紀」に天照の尊号を横領された悲劇の大王――和国王須佐之男尊の三男大歳尊は、父の遺命を受けて紀元前103年頃、多くの部族を率いて大和に東遷し、河内・大和から東海・南関東を版図に同盟を組んだ日本王朝大和国を建国し、饒速日と名乗った。日本の国名は饒速日尊が名付けた日本が起原となった。

大和国は幾星霜を経て大和国と呼ばれるようになり、その後中国の「魏志」は邪馬台国、「隋書」は耶摩堆と書いた。饒速日尊は、稲作や薬草の製法等を伝授して民衆の食糧や病氣平癒にも気を配り、多くの偉業を残した。死して

皇祖天照魂大神・日本大国魂大神・大歳御祖神として祀られていた。ところが、八世紀に大和政権を乗っ取った百濟族によって編纂された「記紀」は、史実を抹殺し、祭神の神号まで横領して新たに伊勢神宮の天照大神を創作した。伊勢に天照大神の祠を創ったのは、持統天皇四(690)年、「書紀」の編纂途上だった。「記紀」の天照大神は、本名向津毘売尊で須佐之男尊の日向妻だった。

## 第五章 磐余彦尊大王の大和朝廷の成立

和国王須佐之男尊の孫磐余彦尊は、筑紫日向宮から遙々、大和の饒速日大王家の娘に婿入りし、紀元前60年、橿原宮で王位を継承した。「書紀」に云う神武天皇である。「記紀」は、「神武東征」と書き、大和を武力で平定し饒速日命は帰順したと嘯いた。

## 第六章 邪馬台国と女王卑弥呼の時代

「魏志」にみる女王卑弥呼は、王女の中国表記で、初代

の卑弥呼は倭母母曾毘賣王女で、その後を継いだ女王は豊鉏入日賣王女だった。女王豊鉏入日賣は中国の魏朝に献使を送り、魏の景初三(239)年十二月、魏王明帝から「親魏倭王卑弥呼」の称号とともに金印紫綬や銅鏡等を贈られ、多くの文物・文明を導入した大王(天皇)だった。しかし、「記紀」は、その治績を抹殺して崇神・垂仁天皇の治世に書き、「書紀」は2世紀も後の神功皇后(氣長足姫尊)に擬した。

## 第七章 古代天皇の実年代

「書紀」によって引き延ばされた古代天皇の年紀を墓誌で糺して生存年代を復元、古代天皇の実年代と在位を正した。

「書紀」は、年紀を引き延ばすため、古代の天皇の崩年(12歳とか、14歳とし、初代神武天皇(記)倭伊波礼毘古命、「記」磐余彦尊)の即位年を十干支(60年)も遡らせていた。

その意図は、当時の大国(唐)に対して背伸び外交のためと考証した。

## 第八章 大王を支えて国政を推進した建内宿禰

「書紀」の天皇年紀引き延ばしの煽りよって240年も生きた伝説の人物とされた建内宿禰と後裔の活躍を明らかにし、実在を甦らせた。建内宿禰は、紀国名草郡松原村柏原で生まれた物証も確認できた。

八代孝元天皇の皇子彦太忍信命の曾孫建内宿禰の子孫葛城氏・紀氏・平群氏・蘇我氏一族は、子女を大王の后や妃としてたて、時には大王・大臣として日本の黎明期を支えてきた。弘仁六(815)年に撰上された「新撰姓氏録」には建内宿禰の子孫が畿内だけでも50姓氏に及ぶ。

## 第九章 他国の史書で糺す大和国の外交

紀元前260年から平安時代に至る近隣諸国の動静や古代日本の国交と紛争の実態を、他国の史書によって明らか

にし、扮飾された記紀の記述や偽装を正した。

『後漢書 東夷列傳』に、「建武中元二(57)年、倭奴國が貢をもつて朝賀、光武は印綬を以てす」と、あるのは、第三代安寧天皇の王子常根津日子伊呂泥命(記)だったことが、天明4年(1784)に博多湾沖の志賀島の畠で発見された金印に書かれていた「常根津日子命」の銘が画像解析で判明した。

同じく『後漢書 東夷列傳』に「安帝永初元(107)年、倭国王師升等、貢ぎに生口百六十人を獻じ請見を願う」と、あるのは、「書紀」の第6代孝安天皇、日本足彦国押人天皇、「記」では大倭帯日子國押人命のことであった。後漢書にある「倭国王師升等」は「倭国王師升等」と読める。

こうして倭(大和)国は、後漢時代(25~220年)から貢ぎをもつて外交していたのである。

さらに、「魏志」が書いた「倭国大乱」は、「書紀」の10代崇神天皇(189)年紀にみえる8代孝元天皇の妃埴安媛命の王子武埴安彦(記)建波邇夜須昆古命(128~167年)と、妻

の吾田媛あたひめによる乱のことだった。また、「景初三(23)年六月、倭の女王は大夫難升米等なしみめを遣わして帶方郡役所たいほうぐんに詣り、天子に詣りて朝献を求めてきた。(中略)。その(23)年の十二月、詔書して倭の女王に報せて云う。「親魏倭王卑彌呼ひみこに制詔する」と。この時の倭王卑彌呼は、「書紀」に云う崇神天皇と荒河刀弁あらかわとべの娘遠津年魚眼とほつのあゆめ眼妙姫命まほしひめの王女ひめみこ豊相入姫とよすきいりひめ(記)は豊鉏入日賣命とよすきいりひめで、「魏志」は、王女ひめみこを卑彌呼ひみこと書いた。卑彌呼は倭王であり、大王(天皇)だった。

隋ずいの開皇二十(60)年と大業四(608)年に、長らく途絶えていた中国との国交に、初めて小野妹子おののいもこ臣を遣隋使として派遣したのは倭王天足日子あまたらしひこ大王おほきみ(蘇我馬子そがのうまこ大王)だった。

推古天皇すひこや太子厩戸皇子うまやとのみこは「書紀」の創作した架空の人物だった。

## 第十章 大和政権を乗っ取った人々

―そのとき歴史書は偽作された―

乙巳いつし(645年)の変は国際陰謀いんぼうによる韓半島百濟族くだらの大和政権乗っ取り事件だった。時の大和政権蘇我善徳大王そがせんとく(聖徳太子)を暗殺し、蘇我入鹿を成敗したと書いた。

政権を乗っ取った百濟族くだらは、己の出自を隠して系譜を偽作し、正統性を主張して史実を改竄かいざんした「記紀」を偽作した。

「大化の改新かいしんの詔みことり」は、蘇我大王家三代の功績で、この年は孝徳天皇こうとくではなかった。孝徳天皇の即位は白雉元(65)年だったことを『新唐書』が証明した。

また彼らは古代から神社に皇祖として祀られてきた饒速日にぎはやひ(大歳尊)の偉業を隠すために、神社の縁起や神名まで改竄かいざんした。その代表的な神名は、「大物主神」だった。

## 第十一章 聖徳太子の虚像と実像

聖徳太子のモデルは蘇我善徳大王そがせんとくだった。彼は太子時代に蘇我馬子大王そがのうまこをたすけて遣隋使けんずいしを派遣し、大國隋ずいの文明・文化と仏教を導入し、我が国最初の本格寺院法興寺ほうこうじ

建立の統領として活躍した。その後も法興寺の寺司(管長)として古代仏教布教の祖となった。

馬子大王亡き後、蘇我善徳は大王として国政改革に功績を残した。「書紀」による偽名の蘇我入鹿は、横政の汚名を着せられ歴史に名を残した。方や偽作の太子厩戸皇子は、飛鳥の聖者と称えられ一万円札にもなつてこの世に名を残した。太子厩戸皇子は、全くの架空人物だった。

「書紀」の創作説話は誠に巧妙で、先学諸氏の論考もそれに乗せられていた。太子厩戸皇子の父とする用明天皇は、蘇我馬子大王の分身として造作されていた。

聖徳太子の御陵(磯長陵)は、蘇我善徳大王が暗殺された後、馬子大王の娘月益姫(善信尼)善徳大王の妹か・物部守屋の娘玉照姫・小野妹子の娘日益姫の三人は出家得度し、それぞれ善信尼・惠善尼・禅蔵尼と称して聖徳太子の陵守りをしながら菩提を弔っていた[西方院縁起]。そして、14世紀も経った今なお蘇我氏の親族が永々と墓守を続けておられる姿に接し、陵主は大王蘇我善徳

だったことを確信した。

## 第十二章 飛鳥時代の天皇 治世と実年代

飛鳥時代の用明・崇峻・推古・舒明・皇極の各天皇は「書紀」の造作だった。当時の大王(天皇)は蘇我馬子や蘇我善徳だった。舒明天皇は、蘇我善徳大王を暗殺して大和政権を乗っ取った百済の翹岐(中大兄)を、皇統にみせる為、系譜の繋ぎに挿入された百済武王の焼き直して飛鳥に居なかつた。

仏教導入を巡って対立したとする蘇我馬子と物部守屋の戦いで、守屋一族は滅んだとする「書紀」の記述は作り話だった。「書紀」は、蘇我馬子や太子厩戸皇子に攻め殺され、一族はすべて滅んだとする。だが、物部守屋の娘が政敵厩戸皇子(聖徳太子)の菩提を弔うことはあり得ない。物部守屋の子物部雄君は、後に大海人皇子とともに壬申の乱を戦い戦功をあげ、中大兄(百済武王)の王子、翹岐「書紀」の天智天皇が近江(滋賀県)にたてた百済政権

から王権を奪還した。

○第十三章「壬申の乱」は蘇我善徳大王(聖徳太子)暗殺の弔い合戦だった

壬申(672年)の乱は、645年の「乙巳の変」で百済族に乗り取られた大和政権奪還の戦いだった。

「書紀」は、「乙巳の変」で偽名の蘇我入鹿の横政を詰り暗殺の正当性を書き立て、「大化の改新」が成ったと嘯き、中大兄(翹岐)と鎌子(鎌足)智積の功績と称えた。

「書紀」は、「壬申の乱」は兄弟の皇位争いとして史実を隠蔽していた。

乱を制し、百済政権の近江朝を倒して天武天皇となった大海人皇子は、大和政権蘇我善徳大王(聖徳太子)の皇子だった。しかし天武天皇の亡き後、その皇統は次々に肅正・抹殺され、奈良時代の神護景雲4(770)年、天武天皇の直系、称徳天皇が崩後されると再び百済族に席卷され、この国は百済の翹岐(天智天皇)を祖とする天皇と、

百済の智積書紀名：鎌足)の後裔藤原政権となった。

子女を天皇に輿入れさせた藤原一門は、外戚・外祖父となって幼少の天皇を立てて傀儡にし、国政を欲しままにして、莊園制により高い年貢で民衆を苦しめた。

京都市東山に在る天皇家の菩提寺と云う御寺(泉涌寺)は、百済政権の天智天皇(翹岐)書紀名：中大兄皇子)を始祖とし、昭和に至る各天皇の位牌を連綿と祀る。天武天皇の皇統はもとより、古代からの大和国王統の天皇は一人として祀られていない。「記紀」が、皇祖として造作した伊勢の天照大神さえ祀られていない。如何に皇統を偽装しても天皇家の位牌はそれを見事に証明している。

#### 第十四章 古代の国名・郡・郷と有力氏族

上古の地名と諸国の国名、その由来や郡・郷の構成を明らかにした。また、古代に活躍した氏族や人々の出自を明らかにした。

大和の国名は、須佐之男尊の創建した「和国」に、饒

速日(大歳尊が建国した「日本国」)を、磐余彦尊(神武天皇)が、饒速日王家の末娘と養子縁組を機に合併して拡大し、「大和国」としたものだ。大和は、当初「大倭」と書かれた。幾星霜を経て「大和」と書かれるようになった。

平安時代に書かれた「新撰姓氏録」によれば、畿内だけでも、須佐之男尊や饒速日(大歳尊の子孫が26%にも達しており、中国や韓半島からの渡来人の末裔が30%、そのうち百済人の末裔は10%にも達していることがわかった。

## 第十五章 日本の国号と日章旗

日本の国号はいつ決まったのか「記紀」や「続紀」は黙して語らない。国名の起原を隠した国はどこにもない。

日本の国名は、日本国を命名して大和国を建てた饒速日尊の末裔(天武天皇が、「日本」と云う国名や「天皇」の呼称を使い始めた)と傍証した。あわせて「日の丸」

国旗の歴史を考証した。


8世紀に決まった「日本」の国名は、饒速日尊の名付けた日本国が起原となった。

「記紀」の偽作や造作を検証もせず、それを鵜呑みにした敗戦までの政府や、国政の先棒を担いだ国学者(史学者を信じた教育行政とは恐ろしいものである)。

間違った歴史教育は教育行政が責任をもって正しくしかない。

我が国古代の歴史は、「記紀」の偽作や創作された記述によって、その後の歴史研究は振り回されて史実は見えなくなっている。

国民が胸を張って、この国の建国史を語れるようにするには、文部省と、その先棒を担いで国民を欺いてきたの史学者の責任は重大である。

Next 



「古代日本原記」要約